

ビバハウス便り NO. 85 自立支援者全道ネットワークの構築をめざして
～北の支援者全道交流会～「シンの集い」の成功を受けて～

ビバハウス 責任者 安達 俊子

今年の夏はこれまでに例のない程の残暑の連続！この暑さの中、今年の夏は、これも過去に例のない程本当に忙しい夏休み(?)だった。北海道教育大学札幌校の平野直己准教授が責任者として企画された2つの行事をビバハウスが、全面的に受け入れたためだ。ひとつは、ビバハウスと北海道教育大学札幌校心理学研究室との共催による「シンの集い・北の実践者交流会」(8月18, 19日、福祉村センターハウス)、もうひとつは、平野ゼミナール主催、ビバハウス後援(?)の「学生(援農)ワーク・キャンプ」(8月17, 18, 19日、ビバハウス宿舎)だった。

「交流会」の方は、2日間で約40人の全道各地からの若者の自立支援に関する学校、施設、病院、研究機関などの従事者が各地からの実践報告を受けて、活発な論議が展開され、2次会は深夜まで延々と繰り広げられた。私たちは、実行委員会の指名を受けて、「余市の若者支援の現状と課題について」のシンポジウムで、夫がコーディネーター、私がシンポジストの勤めを果たさせて頂いた。地元余市からは、道立余市紅志高校の本間康子先生、北星余市高校の安河内敏校長先生、福祉村理事の宮井真由さんも参加し、素晴らしい発言で、全参加者に大きな感動を与えた。

中でも嬉しいのは、宮井さんが交流会後に私たちに寄せてくださった言葉で、ご本人の同意を得て、以下ご紹介させて頂きたい。「安達さんが名乗りを上げてくださらなければ、今回の企画はありませんでした。準備に関らせていただいたこと、発言の機会をつくってくださったこと、参加された皆様からのフィードバックにより福祉村の存在意義を確認できたこと、どれも貴重な体験となり、今後私が余市という地で心理職として生きていくベースを作っていたいただいた気がします。」

宮井さんの発言に有る、「安達さん云々～」は、実は昨年「国立ひだか青少年自然の家」で開催された、「北海道青少年相談ミーティング」での懇親会の席で、平野先生から、「余市にはおいしいブルーベリーもあるから、是非一度はこのような会を余市でやってみよう。」との発言があり、夫が「大賛成」と応えたことを指している。いずれにしても、これまで公的施設ばかりでやられてきたこのような集まりが、福祉村とビバハウスの施設で行われたことは歴史的だと思う。

特に民間施設も活用し、今回の「余市集会」のような試みが、全道の各ブロック単位で毎年実施されれば、若者支援に絶対に欠くことのできない、全道的ネットワーク構築のために、決定的に重要な役割が果たせると思う。ちかじか平野先生を初め見事に会を成功に導いた実行委員会の皆さんに再度余市に来ていただき、今回の総括と来年に向けてのお話し合いをすることになっている。

毎年ビバに来る埼玉大学安藤ゼミ「草むしりツアー」の伝統を受けて、今年は北海道教育大学、北星学園大学からの「援農」ワークキャンプを受け入れたのも嬉しいことだった。

